

「登山時報」2019年7月号への投稿記事の補足版です

聴覚障がい者の登山学校参加をめざして：労山大阪府連 奮戦記 2017-018

労山大阪府連常任理事 障登 PT 担当 山下宣郎
労山大阪府連 教育遭対部長 中川和道

1. はじめに、ろう者（聴覚障がい者）の悩みとは？

本題の前に、まず、ろう者の悩みとは何かを述べます。

1. 「情報が入ってこない」

電車やバスが止まったときアナウンスが流れますが、聞こえないので何を言っているかわかりません。音声情報が入ってこないなので、とても不安です。

2. 「情報が伝えられない」

電話ができない。山での事故対応が110番119番の緊急ダイヤルしかないので、とても不安です。

3. 「誤解される」

ろう者（聴こえない）は見た目だけではわからない障害です。つまり見えない障害なので判断しにくいです。コミュニケーションの障害とも言えます。登山中、後ろにいた人から声をかけられても聞こえないのでまったく気づかないため、相手は無視されたと誤解しやすいのです。

ろう者のこれらの悩み、現状を打開できるには、ソフト面で健聴者（聴こえる人）に協力してもらう事が重要です。また、健聴者とろう者がお互いに理解を深めることや、コミュニケーションについて考えることが大切です。

2. 2017、2018年度

大阪労山には障がい者登山実践の長い実績があります。ところが2017年度、それだけでは解決できない要求が明らかになりました。発端は、ろう（聴覚障がい）の会員からの「登山学校でアルパインクライミングを学びたい」という入学要求でした。アルパインクライミングを、ろう者とどう学べるのか？安全を確保するための技術も策もなく、2017年度はついに受講にいたりませんでした（その後も実現できていません）。労山の会員の方、健聴者とろう者双方が互いに歩み寄って、壁を乗り越えるために、労山役員と教育遭難対策部スタッフ、会員のろう者と手話通訳者にも協力を頂き、「障がい者の登山学校参加にむけてのプロジェクト会議」（通称「障登 PT」）を2017年度に立ち上

げ、いろいろな議論を重ねてきました。2017年度、2018年度はろう者の方々を受講ラッシュの記念すべき発端の年となり、新たな試みがたくさん行われました。本稿では、その奮戦記を紹介します。全国にはもっと様々な体験が蓄積されているはずですが、それらの交流のきっかけになれば幸いです。

3. 大阪府連の登山者養成の流れと、ろう者参加の新たなうねり

図1に大阪府連の登山者養成の流れを示します。2017年度2018年度には、この図

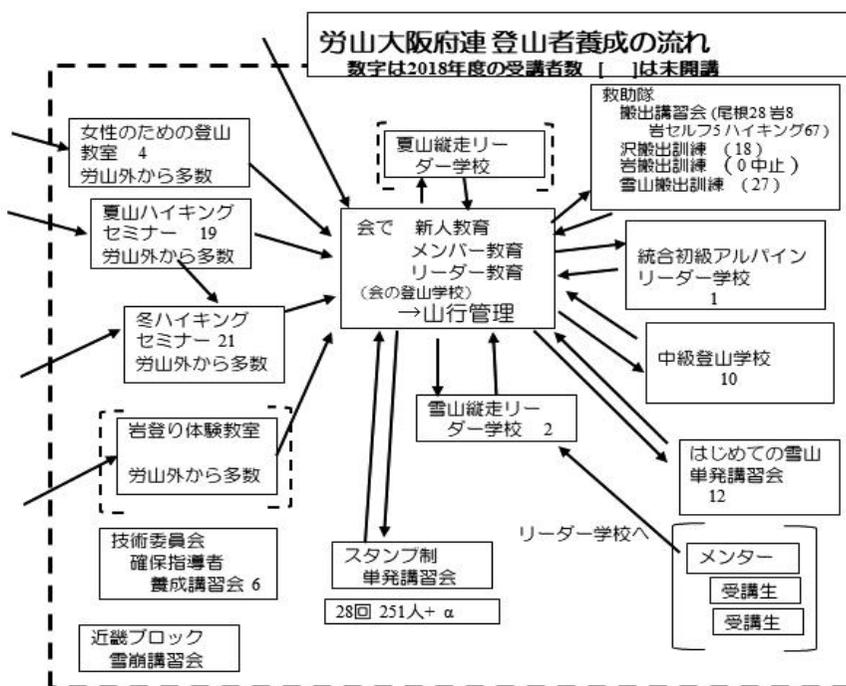


図1. 労山大阪 登山者養成の流れ

で、夏山ハイキングセミナー、冬山ハイキングセミナー、はじめての雪山講習会、スタンプ制単発講習会に、ろう者が新たに延べ40名も参加したのです。大きなうねりが始まった記念すべき年でした。

労山大阪ではこれまでも府連総会などでは手話通訳をお願いしてきました。しかし実技の場をどう運営したらいいか、経験がありませんでした（1974年当時の府連には「リーダー会」が存在していて、そのメンバーにはたつこの労山のT己さんがおられたのですが、以前にあった経験が今は途絶えています）。そのため、図1の各部門は、まるで

手探りの奮戦状態で新たな課題に挑戦したのです。

2015年「はじめての雪山講習会」に、ろう者が初めて申し込みました。講習会コーチスタッフは、手話通訳資格をもつクライマーの方に数時間の講習を受け、それを踏まえて受講可能かどうかを判断することとなりました。「カードやメモを見てもらう、空中に字を書く、正面でゆっくりはっきり話し、口の動きを読み取ってもらう、行動中は後方からは肩をたたく」などの教示を受けました。受講可能かどうか事前の瀬踏みを行うため、この方を蓬莱峡（映画「7人の侍」「ウルトラマン」の撮影で使われた土の大きな渓谷。アイゼン歩行、滑落停止、ピッケル使用など冬山の事前訓練によく用いられている）にお誘いしました。その結果、専属のコーチ1、2名についてもらうなどの施策のうえで参加を認めて大丈夫であるとの結論となりました。この方は実際に、蓬莱峡での本番の訓練を経て、大日ヶ岳訓練（ラッセル・雪洞泊・滑落停止訓練・固定ロープ技術など）を経て冬の八ヶ岳 赤岳にも登られ、先駆的な成果を残されました。

地図を読む実技講習にも、ろう者が参加されました。講師は何とか実力をつけて帰っていただくといういろいろ思案されました。小さなホワイトボードにマーカーペンでそのつど字を書く従来の方法に加え、「尾根筋」「谷筋」などよく使う言葉はあらかじめ手のひらサイズのノートに書いておき、めくって示すと早くて効果的だったと、この講師は語っています。

座学へのろう者の参加は、健聴者にとっても大きな教訓となるものでした。「ろう者はメモをとることができない。手話通訳から目を離すことができないから。」ということ、健聴者はこういう場で初めて知ったという具合で、ろう者が勉強の効率を上げるうえでの独特の難しさに思い至ったなど有用な経験となりました。

スタンプ制単発講習会の座学「遭難事例研究」「パーティー論リーダー論」「気象」などにも、ろう者が多く参加しました。ろう者にいかに分かってもらうかという問題は講師たちにとっても新鮮な課題で、新しいものが好きな講師たちによって、いろいろな試みがなされました。それらを列挙します。

- (1) キーワードの名詞だけだと結論が肯定か否定か分からない。説明型のパワーポイントファイルを作るとよい。具体的には、文章にして短く言い切る、表や図には「〇〇が分かる」など、何を読み取るかを結論まで書き込む。キーワードのみを示し、結論を言葉で述べるプレゼンは避ける。
- (2) カラビナ、懸垂下降という手話単語はまだない。ましてや気象学や登山の法律論のややこしい用語の使用には、ていねいな導入が欠かせない。
- (3) ここで、近年の発展が著しいIT技術の活用についてその手順と教訓を特記して述

べておきます。

4. 座学講習における音声文字同時変換ソフト利用の試み

(1) 音声文字同時変換ソフト

しゃべった言葉を即座に文字に変換してくれる音声文字同時変換ソフトは、近年、IT 技術、人工知能技術を駆使して急速な発展をとげています。例えば、Google を立ち上げると無料で使える「Google ドキュメント」の「ツール」→「音声入力」機能を使ってみました。Skype にも最近「録音機能」がつかえました。

(2) さっそく使ってみました

大阪府連の河野仁副会長がスタンプ制単発講習会事務局の K 村さんとともに気象講座に使い、大阪府連メーリングリスト OWAF-ML にその使い方手順を投稿されました。中川もさっそくやってみました。図 2 にその一例を示します。

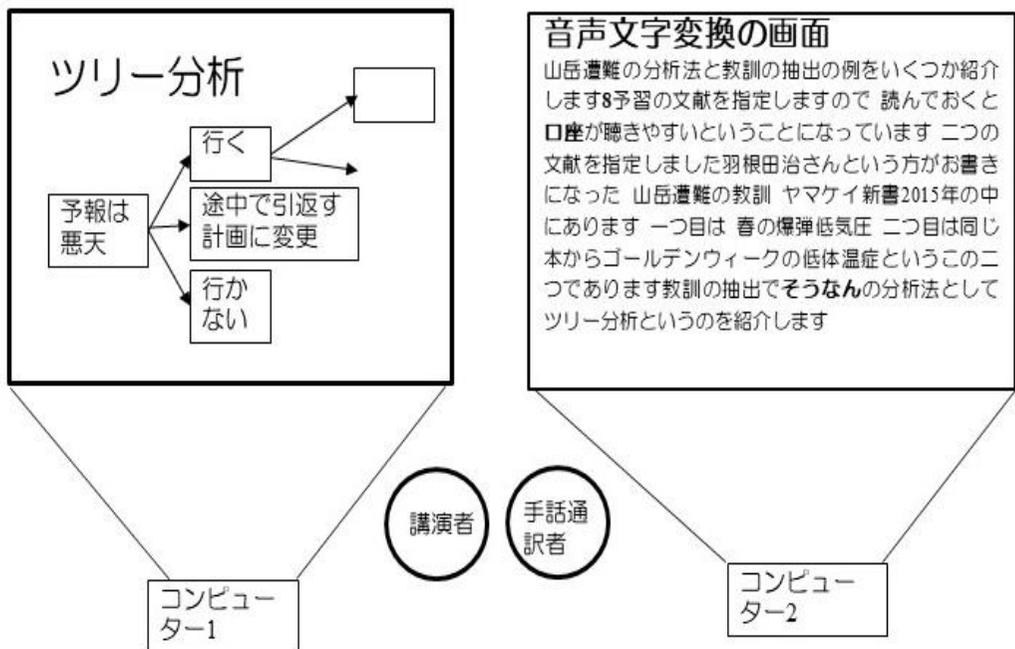


図 2. 音声文字変換同時通訳ソフトの使い方

演壇には講演者、同時通訳者が並び、スクリーンを 2 つ用いて、ひとつ目には講演資料の投映画面を、2 つ目には Google ドキュメントの通訳画面を投映します。

使うときの注意点です。ゆっくり、発音を正確に、言葉の区切りを明確に区切って話すこと。画面に自分の音声→文字変換の結果が表示されますので、人工知能に

それを学習させます。中川の経験だと、「トムラウシ」は、始めは「弔う市」でしたが、トムラウシ山、トムラウシ頂上、などと学習させると、ちゃんとトムラウシが出るようになりました。句読点（、。）や「」（引用符）などは、まだ変換できません（英語ならできるそうですが）。

スタンプ制単発講習会「遭難事例研究」での中川の使用例を示します。まず、「Google ドキュメント」の「音声入力」がコンピューター画面に表示する同時通訳をそのまま書きますと

山岳遭難の分析法と教訓の抽出の例をいくつか紹介します 8 予習の文献を指定しますので読んでおくと**口座**が聞きやすいということになっています 二つの文献を指定しました羽根田治さんという方がお書きになった山岳遭難の教訓 ヤマケイ新書 2015 年の中にあります一つ目は 春の爆弾低気圧二つ目は同じ本からゴールデンウィークの低体温症というこの二つであります 教訓の抽出で**そうなん**の分析法として ツリー分析というのを紹介します

と表示されます。少し解析しましょう。(1)「えーと」が8と表示、(2)「講座」が口座、(3)「遭難」がそうなん、などの誤変換がさすがにありましたが、他の変換は正確で、「羽根田治」さんのお名前、「爆弾低気圧」などが正確に表示されたので、正直、驚いた次第です。句読点（、。）や引用符「」を補って文章化した結果を下に示します。

山岳遭難の分析法と教訓の抽出の例をいくつか紹介します。予習の文献を指定しますので、読んでおくと**講座**が聞きやすいということになっています。二つの文献を指定しました。羽根田治さんという方がお書きになった「山岳遭難の教訓」ヤマケイ新書 2015 年の中にあります。一つ目は 春の爆弾低気圧、二つ目は同じ本からゴールデンウィークの低体温症という、この二つであります。教訓の抽出で、**遭難**の分析法として ツリー分析というのを紹介します。

変換精度はこのとおり高く、中川は「今の人工知能、おそろべし」と感慨ひとしおでした。

- (3)この文書は、講演者にとっては、直ちに講演録として使えます。さらに、ろう者は手話通訳者を見つめているので、メモをとることがそもそもできなかった。これなら新たにメモとして使えそう。やってみるので、文字ファイルをいただけませんか？」との要望も出され、新たな活用法として注目に値します。
- (4)音声文字同時変換ソフトを用いた講義を行うにあたって、中川はある心配をしました。それは、ろう者の方々が手話通訳を見つめているのに、その横で文字変換の

スクリーンを投映するのですから、ろう者は、(1)「講演資料、手話通訳者、文字変換スクリーン」の3つのどれを見ればいいのか混乱する、さらには、(2)手話通訳者の役割をなくしてしまう行為ではないか、との心配を感じたのです。ずいぶんためらいながらこの心配を相談したら、手話通訳の方にあっさり回答をいただきました。それは、「ろう者は、3つの情報のうち、いちばん適したものをそのつど選んで見ている。心配はご無用です。」とのことでした。中川は安心して活用していこうと思っています。

5. 「障がい者の登山学校参加にむけてのプロジェクト会議」(「障登PT」)の今後

2019年3月10日労山大阪府連第56回総会で決まった「障登PT」の役割や2019年の活動方針を図3にまとめます。

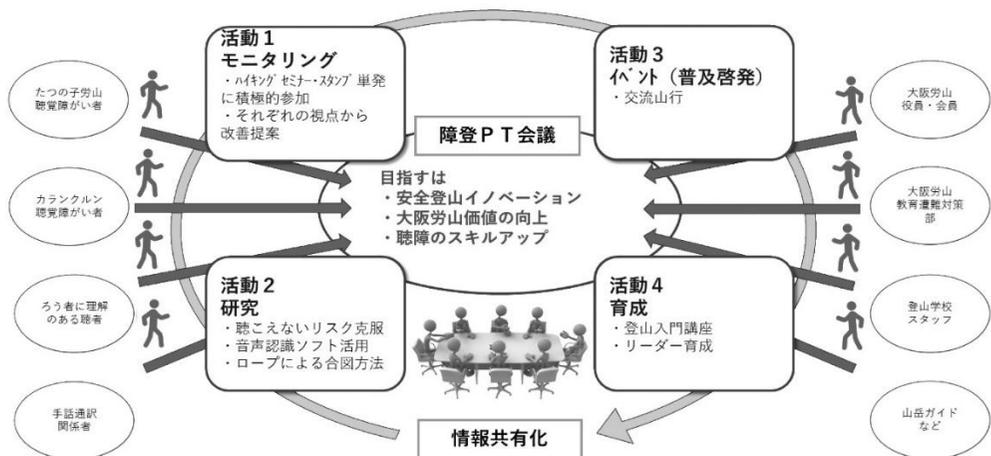


図3. 「障登PT」の役割

2019年度は、以下の4本柱を活動の方針として取り組んでいきます。

- (1)モニタリング：ハイキングセミナーや山の教室に参加。ろう者の視点からの改善点を提案していきます。
- (2)研究：聴こえないリスクを克服するためにあらゆる面で研究をします。
- (3)イベント：ろう者とのコミュニケーション体験ができる交流登山を実施します。

(4)育成：今後のリーダー育成や、情報の共有を踏まえた、参加者のレベルアップのため、聴覚障がい者向け登山入門講座を開催します。

具体的な2つの例を示します。

図4は、上記(3)のろう者と健聴者の交流登山の写真です。2019年1月27日、三峰山で行われた霧氷ハイキングです。写真2は、方針(4)で、ろう者が集まって独自に開催した登山入門講座の第2回目。健聴者の方も参加され、21名と大いに盛り上がりました。これからも、ろう者も健聴者も安心して楽しく山登りができるように、さまざまな課題と、研究に取り組みます。

6. 終わりに

この文章は、2月16-17日の全国評議会でも中川が報告した内容を受けて、さらに加筆したものです。評議会では、「全国にはもっと様々な体験が蓄積されている」という情報を、いろいろな県連から、たくさんいただきました。この文章が、それらの交流のきっかけになれば幸いです。



図4.ろう者健聴者交流霧氷ハイク（奈良・三峰山
2019年1月27日）

